

絵具遊び活動—はじき絵による遊びへの展開—

野角 孝一¹⁾、吉岡 一洋¹⁾、矢田 崇洋²⁾、青木 佐樹²⁾、中山 美香²⁾

1) 高知大学人文社会科学系教育学部門

2) 高知大学教育学部附属幼稚園

Paint play activities—Development to play with Repellent picture—

NOZUMI Koichi¹⁾, YOSHIOKA Kazuhiro¹⁾, YADA Takahiro²⁾, AOKI Saki²⁾, NAKAYAMA Mika²⁾,

1) Kochi University Research and Education Faculty, Humanities and Social Science Cluster, Education Unit

2) Kindergarten Affiliated with the Faculty of Education, Kochi University

要 約

絵具遊び活動は高知大学教育学部附属幼稚園（以下、附属幼稚園）の園児を対象とした活動で、絵具の混色を楽しむことを目的としたものである。本研究では絵具遊び活動の一環で、油性のクレパスの上から水性の水彩絵具を塗り、絵具がクレパスをはじく、はじき絵の制作活動を企画した。附属幼稚園の年中組を対象として、計画当初は絵具がクレパスをはじく技法そのものの経験や達成感を味わうことをねらいとしていたが、描く支持体を工夫することによって、作品を制作することで完結するのではなく、作品を活かした遊びへの展開が見られた。

キーワード：絵具遊び活動、はじき絵、遊び

1. 研究の背景

本研究は 2015 年から継続して行っている絵具の混色を目的とした絵具遊び活動を検証した研究の一環である。玉瀬ら（2019）が執筆した『子どもとアートを地域でつなぐ』¹⁾は、本研究の礎になっている。高知大学では、教育学部門の研究プロジェクト「絵具遊び活動に関する実践的研究—学部教員と連携した幼児教育プログラムの開発—」を 2015 年度より行っている。美術系教員と教育学や社会教育を専門とする教員が横断的に研究連携を行い幼児教育に資する研究を実施している。本研究は、これらの活動を継承するものであり、2020 年は、高知大学教育学部附属幼稚園の園児を対象にはじき絵を行った。絵具遊び活動は附属幼稚園教諭と美術を専門とする大学教員が共同で実践する活動でこれまで様々な活動を行ってきた。

本研究の主題であるはじき絵はパティックとも呼ばれる技法で、油性のクレパスの上から水性の水彩絵具を塗り、絵具がクレパスをはじく現象を活かした技法である

²⁾。パティックとはインドネシアの伝統的な染色技法であり、ジャワ島ではジャワ更紗として知られている。日本では蠟纈染（腸纈染・ロウケチ）と言われている。また、「天平の三纈」とも言われ奈良時代を代表する染色技法である。綿布や絹、麻を染料で染める際に、蜜蝋やパラフィンなどのワックスを防染するために用いる技法である。

クレパスや絵具でそれぞれ描くことも当然可能であるが、それらを組み合わせることによって絵具がクレパスをはじく面白さを体験することができる。

本研究の拠点となる附属幼稚園は新型コロナウイルスの影響により、様々な活動が制限され、当初予定していた絵具遊び活動も中止せざるを得なかった。そのため本研究の打ち合わせについても 10 月に入ってからとなった。研究対象となる附属幼稚園の年中組については、8 月の時点でクレパスを使う頻度が少ないこともあり、年中組の担任は 9 月にクレパスを用いた活動としてはじき絵を行った。はじき絵を主題とした理

由として、クレパスを塗った上から絵具を塗ることで絵具をはじくという感動や達成感を園児達に感じてほしいというねらいがあった。しかし、クレパスの塗り方や水彩絵具の塗り方によるものか不明であるが、結果的にクレパスが絵具をはじく効果が表れた作品は少なかった。大学教員もその作品を鑑賞したが、はじき絵の技法的な効果として、さらなる工夫の余地があると感じた。

9月に行った制作では、その手順として、まず担任がはじき絵の実演を行い、昆虫の絵をクレパスで描くというものであった。その影響もあって制作のテーマを特に設定していないにも関わらず、昆虫や草むらを描く園児が多く、実演や参考作品の見せ方についても課題があることがわかった。

そこで附属幼稚園教諭と美術を専門とする大学教員が共同で行う絵具遊び活動において、再度はじき絵を題材として制作を行うこととした。前述のように課題として挙げたはじき絵の技法の研究と実演方法、参考作品として紹介する作品の制作を大学教員が行うことを打ち合わせの中で確認した。

2. 研究の目的

本研究では当初、はじき絵を通してクレパスの上から絵具を塗る行為によって、絵具がクレパスをはじくことの感動や達成感を園児達に感じてほしいという目的を設定していた、そのため大学教員が実演するための教材研究や作品の見本等の準備を進めていた。また、園児達が制作した作品は額縁に入れ、附属幼稚園内で展示することを視野に入れ、制作する画用紙の大きさの検討に入っていた。しかし、附属幼稚園教諭の話し合いの中で、作品としてはじき絵そのものを制作するのではなく、はじき絵の技法を使ったものを遊びの中で活用できることを研究の目的として変更することとした。それに伴い、当初は制作するテーマを設定していなかったが、「なりきりグッズを作る」というテーマを設定した。園児の自由な表現について、その活動が「遊戯か芸術か」という問いについても検証を試みる。

3. 研究の対象および活動場所

研究対象：高知大学教育学部附属幼稚園年中組（うめ組、うさぎ組 計28名）

活動場所：高知大学教育学部附属幼稚園遊戯室

4. 研究の方法

研究の方法として、最初に年中組の担任がクレパスや絵具で描いたベルトやお面、リストバンド、リボンなどを見せながら、ホワイトボードに書いた制作の手順を基に解説を行った【図1】。尚、本論の写真の掲載については園児および保護者の承諾を得ている。



【図1】担任による制作手順の解説

実際の制作の手順は次の通りである。

- ①じぶんのすきなかみをえらぶ。
- ②かみになまえのはんこをおす。
- ③くれぱすでえをかく。
- ④えのぐでぬる。
- ⑤しんぶんしのうえでかわかす。
- ⑥かわいたら、つかってあそぼう。

園児達が使用する紙は、園児達が複数の作品を制作することを想定して担任が事前に準備を行った。クレパスを塗る際は、様々な色を用いて良いこと、ある程度の強さが必要であることなどを解説した。使用したクレパスは普段園児達が使用している16色入りセットを用い、絵具は黄色、緑色、青色、赤色の4色の水彩絵具を水で薄めたものを絵皿に入れ、机に配置した【図2】。



【図2】使用した4色の絵具

筆はそれぞれの色に1本ずつ事前に入れておき、使用後の筆は元の場所に直すように指導した。また、筆洗器は準備しなかった。

また、大学教員は机間指導を行い、園児達の制作の様子を観察し、声かけなどを行うことで、作品の良さを認め、伸ばしていく一助となるように指導を行った。

事前の想定通り、実際の制作では園児達は複数のはじき絵に挑戦しており、作品の乾燥用に準備した新聞紙が時間の経過と共に作品で埋め尽くされた【図3】。



【図3】制作された多くのはじき絵

ある程度の制作が進んだ段階で、大学教員が事前に用意した参考作品の実演を行い、園児達の興味関心をより一層引き出す工程を加えた。

5. 考察

【図1】のように担任が身につけている参考作品には抽象的な模様がはじき絵によって制作され、実演では丸い形を描いており、園児達に具体的なもの、抽象的なもののどちらでも選択できるような工夫がなされており、実際に制作においても園児達はグリグリとクレパスを塗り込んだものや、虹のように具体的なモチーフ、ハートなどの記号を描いている場合が見られた【図4】【図5】【図6】。



【図4】抽象的な見え方のはじき絵



【図5】虹を描いたのはじき絵



【図6】ハートを描いたのはじき絵

しかし、抽象的な見え方をすることはじき絵を描いた園児達に話を聞くと、「食べ物を描いた」「公園を描いた」など、園児達自身の中で特定のモチーフを描いている場合が多く見受けられた。そしてそのほとんどが園児達自身の経験に基づくもので、楽しかった思い出を表現していることが大変興味深かった。

以上のような制作が行われている中で、園児Aに注目した。園児Aはクレパスを塗った画用紙に絵具を塗ることよりも絵具の混色に着目して活動を行っていた。絵具を使用する場合、通常は筆に付着した絵具を洗い落とすために筆洗器を準備する。しかし、今回ののはじき絵では筆洗器をあえて準備しないことで、制作する中で筆に他の色が混ざり合い、混色せざるを得ない状況になった。最初は画用紙の上で絵具が混ざるが、制作を行う中で筆が他の色の皿に入ること、園児達は色が変化することを発見し、混色を積極的にやり楽しむようになる。

園児Aについても同様で、4色しかない絵具の調合を繰り返し、絵具を混色する度に変化する色味をよく観察していた。はじき絵自体の制作については数点のみであったが、混色の実験についてはそのほとんどの時間を利用して行っていた。

大学教員は園児 A に対して、「また色が変わったね。」
「他にどんな色を作るの？」など、園児 A の混色実験を肯定する声かけを行った。

大学教員が事前に準備したはじき絵の実演の際に、園児 A の許可を得て、混色した絵具を使用して制作を行い、園児 A が混色した絵具の色を全員の前で褒めた【図 7】。



【図 7】大学教員によるはじきの実演

絵具遊び活動は本来、絵具の混色を楽しむ活動である。そういった観点から見て、園児 A は誰よりも混色を楽しんでいたと考えられる。はじき絵の制作時間は園児達自身が決めることになっており、制作を終えると別の場所で他の遊びを始める園児達がいる中で、園児 A は最後まで制作していた数名の中に入っていた。

園児 A は他の園児達が遊びに誘いに来る中で、最後まで混色実験を継続し、附属幼稚園教諭や大学教員が行っていた雑巾がけや使用した机を元の教室に運ぶなどの後片付けにも積極的に参加していた。最後に「今日は楽しかった？」と尋ねると、「色がいっぱい作れて楽しかった」と回答していた。

以上のことから、混色実験による充実感があったからこそ、掃除まで積極的に手伝う姿勢を見ることができたと推測した。

また、園児達の制作に対する姿勢については、担任達の観察では制作後に遊びに使えるということで、普段の制作と比較して園児達の意欲が高かったように感じたとの指摘があった。園児達が色を塗った紙を何に使うかのイメージをしてから、画用紙の形や大きさを選択していたことから、園児達が自分たちなりにテーマを持ち、完成した形のイメージをしながら絵を描いてみるという経験をしたのではないかと推測している。

完成した作品は空き箱に貼り付け、紐を付けてマイバッグにする場合や、剣の鞘に貼り付けて自分だけのデザインにするなど、単なる制作では留まらず遊びに使用するものに還元されていた【図 8】。



【図 8】はじき絵を貼り込んだマイバッグを持つ園児達

はじき絵を制作した次の日には、段ボールで衣装を作った園児が「昨日みたいに、絵具で衣装の色を塗りたい」と言い、別の形で絵具遊びが展開したとの担任からの報告があった【図 9】。これがまさに、はじき絵から遊びへ展開という本研究のねらいであり、園児達自身で考え、行動したことがうかがえる。



【図 9】段ボールの衣装を塗る園児達

園児の行動やその活動そのものについて、ハーバード・リード（1953）³は次のように述べている。

小児は出生の時から自己の表現を始める。最初は小児が外部の世界に知らせようとする本能的欲望を表現するのであるが、その外部の世界は、はじめはほとんど全く母親だけによって代表されている。その最初の叫びや身振りは、小児が他に意思を通じようとする初歩の言語である。（中略）自由表現は身体の活動や精神の作用の広汎な範囲にわたる。児童の遊戯は自由表現の最も明白な形式である。（ハーバード・リード 1953、pp125-126）

園児の表現活動を遊びへ誘うのではなく、表現活動そのものが園児の自己表現であり、自己の内面の可視化に影響を与えていると考えることができるのではないだろうか。しかし、学年進行により、自己表現の方法や自己の喜怒哀楽を絵画や造形、身体表現を用いて表していたものが、言語化へと無意識に変容することも人間の成長過程として自然なことなのかもしれない。

さらに別の観点から園児Bに注目した。はじき絵の後片付けが終わった後、園児Bが一人で制作した作品を見に来ていた【図10】。



【図10】作品を鑑賞する園児B

制作した作品が乾いたかどうか確かめに来ており、「もう乾いたかなあ？」と大学教員に尋ねてきた。

せっかくなので、他の園児達の作品と一緒に鑑賞し、作品の良さの解説や感想などを尋ねた。園児Bの作品について、「どうやって遊ぶの？」と尋ねると、「知り合いの人にあげるんだ。喜んでくれるかなあ？」と回答した。話を聞くと、制作当初から一番気に入ったものを知り合いの人にあげるために制作したとのことだった。本研究のはじき絵は園児達自身で遊ぶように制作することを想定し、指導を行っていた、しかし、園児Bについては自分ではない人のために制作していたのである。

制作を専門とする大学教員にとって、制作は自分自身を表現する方法の一つである。誰かのためにということも念頭に置いて制作する場合もあるが、突き詰めると自分自身のために制作している。しかし、自分自身が遊ぶためではなく、他の人のために制作していた園児Bのような園児がいたことは事前の想定を超えており、絵具遊び活動を行う意義の一つとなったと言えよう。

6. まとめ

大学教員は普段は学生に制作を教えているため、作品を完成させることで、次の制作に向けての反省を促すことが、指導の重要な過程の一つとなっている。しかし、園児達の立場では作品を完成させることよりも、制作し

た作品で次の遊びにつなげる、あるいは園児達自身で新しい遊びを考えるきっかけとなることが改めて重要であると確認できた。本論で述べてきたはじき絵を用いた活動は、手法の原理を理解することが目的ではなく、園児が表現方法を獲得して、その後に自身の経験や想いを抛り所にした表現活動することを観察評価で知ることができた。つまり、これからの表現活動は、遊戯としてはじき絵を介して感情を外に表そうとする社会的な活動に向かっているのであろう。絵具の混色を楽しむという絵具遊び活動の目的を抛り所としながらも、そこから園児達の遊びを通したコミュニケーションや新しい発想につなげられるテーマを設定することが今後の課題であると言えよう。

謝辞

本研究は部門研究プロジェクト経費「絵具遊び活動に関する実践的研究—大学教員の連携による幼児教育共同プログラム—」（研究代表者：野角孝一）の助成を受けました。記して感謝の意を表します。

引用・参考文献

1. 玉瀬友美、土井原崇浩、谷脇のぞみ、中村るい、野角孝一、野中陽一朗、柴英里、斉藤雅洋、吉岡一洋 (2019) 『子どもとアートを地域でつなぐ』リーブル出版
2. 村田夕紀 (2011) 『3・4・5 歳児の楽しく絵を描く実践ライブ』、ひかりのくに株式会社、106 頁。
3. 植村鷹千代、水沢孝策 (1953) 『芸術による教育』美術出版社

